戦略グループ会議報告書

〈戦略グループ会議の名称〉 農林業と生物多様性	〈参加人数〉 102人（別紙参加者名簿のとおり）
〈主催グループ名〉 印旛郡市土地改良協会	〈代表者名〉 金親博榮（かねおやひろし）
〈実行委員名〉※協力者 清水・髙橋・伊藤・林・小倉・尾高・小川	〈協力団体名〉 水土里（みどり）ネット印旛沼（印旛沼土地改良区）
〈開催日時〉 平成19年6月30日（土）　1:30pm～4:45pm	〈開催場所〉 印旛沼土地改良区

〈会議で話し合われたテーマの概要〉

田んぼのなりわいと生物多様性

「農林業と生物多様性戦略ｸﾞﾙｰﾌﾟ会議」は、水土里を守る農業者と生物多様性を中心に環境保全活動を行う市民ほか農業・農村整備を図る関係者など102名が参加して水土里ﾈｯﾄ印旛沼で行われました。農業者にとって「生物多様性(・・？)」となることから、aciesの渡辺氏から「水田と生物多様性」について、まずは話題提供をしていただき、足下で育つ生き物のことを思い出してもらい、環境に配慮した水田農業や農業農村の整備、二次的自然（水土里）を守ることで生物の多様性が図られるなど、その多さ少なさの課題も含み田んぼのなりわいを振り返るきっかけ作りから始まり、続くﾌﾘｰﾄｰｸでは、日本農業新聞の板垣氏がｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰとなり「生物の多様性を図るためにあなたができることは？」を中心に会場の声をすくい上げてもらい、市民ｻｲﾄﾞからは里山や里地の荒廃問題、有機農業の推進で図る生物多様性など意見が飛び出し、農業ｻｲﾄﾞからは、ｺﾒ作り農家のきびしい現状や千葉ｴｺ農業また冬期湛水の取り組み、農業農村のもつ多面的機能の維持に通じた農地・水・環境保全向上対策への注文など、事例紹介を中心に意見が出され、あっという間の90分でした。締め括りに堂本暁子知事から、農業環境が大きな曲がり角にきているなか生物多様性と農業を考えたとき、かつての日本は、生態系の循環を生活の中と農業の中に取り入れてくることの天才であったと思うことから、水の循環とか生物の循環とか、色々な循環の視点からもう一度考え、ずっと培ってきた農業をさらに良い形で21世紀の中で発展させていく。その手法については、農業のﾌﾟﾛの方々に「これからは、こういうふうにすることがいいよ！！」ということを、みんなで考え、意見を出し合っていくことが大事と語り、最後に食の大切さを結びとして農業に対する熱い期待を寄せていただきました。

また、印旛郡市土地改良協会から差し入れとして、おやつの時間に「田んぼを守る魔法の粉」で作った米粉ﾊﾟﾝがｻｰﾋﾞｽされ、米消費拡大と水土里を守る作品のひとつ！とPRがありました。

グループ会議からの提案

1．グループ会議にとって、生物多様性の保全・再生のための課題は何ですか？

○**水土里**（みどり）の持つ課題

＊水を使う者の意見として、生産者だけが農薬・化学肥料などの量を減らしても都市側の排水が改善されなければ生物多様性など図れない。

＊ヘリコプター防除を考え直すとき、ただし慣行をやめる農家の勇気が必要。

＊生物多様性を含む多面的機能の維持に通じる農地・水・環境保全向上対策は手続きが複雑。

○県民が考えた課題

＊有機農業の推進を考えた場合、行政が流通も踏まえきちんと位置づけることが大事。

2．課題を解決するために、何をすべきですか？

○**水土里**（みどり）の考える解決策

＊有機農業推進法に基づく環境保全型農業の取り組み。

＊農産物価格の低迷、農業機械の価格問題、環境に配慮したばかりに等級の下がる農産物問題など、色々な側面で補助が必要。

○県民が考えた解決手法

＊里山・休耕田（耕作放棄農地）を地域住民で保全することにより環境悪化を防ぎ、メダカを中心とした生物多様性が図られる。地主である農家の理解と市民連携が大事。

＊教育機関の理解も必要であるが「食農」に通じ田んぼを保全していく。

＊米ぬか利用の不耕紀栽培で窒素肥料など使用量の削減＋雑草対策は湛水により解決。

3．誰が、どのように進めますか？（農業者・事業者・県民・行政等の役割・相互理解）

○**水土里**（みどり）の取り組み

＊生産コストを考えれば、最低限の肥料・農薬の散布となり、環境配慮に通じる。

＊田んぼの水管理も水をよごさぬ一つとなる。

＊施肥・農薬散布の仕方で変わる投入量。

○県民の支援・分担

＊農家の方々に「田んぼを荒らさないにしようよ！」、「土地も売らないにしようよ」といった啓発も大事。

4．Free

○**水土里**（みどり）の情報発信

＊田んぼに生き物がいればいるほど水がきれいになる。（冬期湛水実践者）

＊自分の田んぼで捕れたザリガニやドジョウは、害があると思っていないので食べる。

〈グループ会議協力者〉

（社）農村環境整備センター 第一部長 上 月 良 吾 氏＊話題提供…acles…

日本農業新聞千葉通信部 記者 板 垣 勝 弘 氏＊フリートーク コーディネーター

※資料提供：環境省自然環境局自然環境計画課生物多様性地球戦略企画室ほか

戦略グループ会議　報告書

＜戦略グループ会議の名称＞ 生物多様性センターの役割と仕組み	＜参加人数＞ ３２　　人
＜主催グループ名＞ 情報・研究センターと生物多様性	＜代表者名＞ 栗原裕治
＜実行委員名＞ 栗原裕治	＜共催（協力）団体名＞
＜開催日時＞ ６月３０日	＜開催場所＞ 千葉県立中央博物館

＜会議で話し合われたテーマの概要＞

（仮称）生物多様性ちば県センターは、（仮称）生物多様性ちば県戦略を推進する上で科学的な知見に基づく公正な施設として不可欠な機関である。また、（仮称）生物多様ちば県戦略をぶれない確かなものにするために、県民に支持されるとともに、政策や事業に対して、助言、提案を行うほか、勧告の役割も担うなど、一定の権限を有する機関であることが望まれる。

各グループ会議からの提案

１．各グループ会議にとって、生物多様性の保全・再生のための課題は何ですか。

■１）調査研究、２）情報の集積・標本等の整理、３）情報・人間のプラットフォーム、４）広報・啓発、５）助言・提案・勧告の機能を持つこと。

■現場の取り組みや課題が尊重されるような地域主義・県民参加を大前提とした現場密着型で、ガラス張りの機能であること。（生物多様性の保全、再生、持続的な活用のために、地域の多様性、文化の多様性、人間の多様性等、様々な多様性とネットワークを尊重する機能であること。）

■（仮称）生物多様性ちば県戦略をぶれないかたちで推進するために、景気動向や特定の権力の都合に対して、科学的知見に基づく活動の中立性を守るために、安定した運営基盤と一定明確な役割を担う独立機関が望ましい。

■上記の目的を達成するために、行政・県民の有識者・専門家が運営や評価に協働で責任を持つ仕組みを構築し、運営資金についても基金の創設や水源税等の環境税の導入を検討する必要がある。

２．課題を解決するために、何をすべきですか。

・市民が参画し、市民が支持するには、堅苦しいサイエンスだけでなく、楽しいサイエンスも必要。（プラットフォームを機能させるために、コーディネータ、コミュニケータ、プロデューサー、ウェブ・デザイナーなどが重要。自然科学と社会科学の融合が必要。）

・ローカルステーションを設置し、センターとの連携を強化する。（センターの運営にローカルステーションの代表が参画したり、人事交流を推進する。）また、国や国際機関との連携も必要。

戦略グループ会議　報告書

・市町村単位の生物多様性センターの設置を支援し、住民が参画する環境政策を自治体運営の中核にしていく社会的な流れをつくる。
・地域の市民科学者、コーディネータ、コミュニケータ、プロデューサ等の育成や地元の活動団体との連携。
・生物多様性の真のセンターとして、縦割りを束ねる総合対策機関の役割を担う。
・定期的なモニタリング等、調査手法の標準を示し、実施する。また、生物多様性の保全、再生、持続的な活用のための技術や事例を収集する。

３．誰が、どのように進めますか。（県民、事業者、行政等の役割）

・（仮称）生物多様性ちば県センターの準備室を２００８年度の冒頭に千葉県立中央博物館の中に設置し、関連する他の千葉県の研究機関との連携や統合を進めつつ、センターの骨格をつくる。
・市町村の環境政策との連携、民間の環境ビジネスとの連携、開発に関わる環境アセスメントのチェック機能と勧告。（生物データだけでなく、開発データ等も蓄積する。）
・定期的なモニタリングを県、市町村、教育委員会、民間企業、県民が協働で行う全県的に取り組むシンボリックな事業とする。

４．自由記述

生物多様性ちば県センターが必要な機能は、調査研究機関であり、情報センターであり、シンクタンクであることから、県立博物館の資源の活用をベースに準備を進めることが現実的かつ効果的である。もう一つ重要なのが、現場（地域あるいは市町村レベルのローカルステーション（サテライト）の機能と考えられる。

※1 枚で収まらない場合は、２枚になってもかまいません。

戦略グループ会議　報告書

＜戦略グループ会議の名称＞ 水循環と生物多様性	＜参加人数＞ 30　　人
＜主催グループ名＞ 里山シンポジウム水循環分科会	＜代表者名＞ 桑波田　和子
＜実行委員名＞ 加藤賢三、荒尾繁志、千葉智雄、桑波田和子	＜共催（協力）団体名＞ 環境パートナーシップちば プロジェクトとけ、越智メダカの会、 千葉工大(瀧研究室)
＜開催日時＞6月30日(土)Am9：30～Pm3：30	＜開催場所＞千葉市越智公民館

＜会議で話し合われたテーマの概要＞

谷津田は生物多様性が豊かなところであることは周知である。そこには、湧水とそれを利用して稲作が行われている。今回は、湧水と生きものの現場を見学し、水循環と生物多様性について、現状、課題、解決する為には？各主体の役割は？について、意見交換を行った。

各グループ会議からの提案

1．各グループ会議にとって、生物多様性の保全・再生のための課題は何ですか。

1) 湧水、谷津田の保全。(開発、涵養域、不法投棄)
2) 休耕田(農業の担い手がいない→高齢化・なりわいが難しい)
2) 農業のありかた(乾田化する水田)
2) エコ農業の推進(硝酸態窒素)
3) 湿地の重要性。
4) 湧水(里山)の大切さ(価値)を、皆で共有し、高める。
4) 子ども達に谷津田体験をする機会を設ける(環境学習)。
5) 外来種、帰化植物
6) 生物多様性の考え方、重要性について、一般の方々の理解をどう広めていくか。

2．課題を解決するために、何をすべきですか。

1) 温暖化防止(CO2削減)の視点から、里山保全(涵養域等)。
1) 谷津頭へ不法投棄をさせない。
1) トラスト制度の活用。
1) 県レベルで、生物多様性のある空間や貴重種を保全する枠組みを作る。
2) 援農。
2) グリーンコンシュマーとして、農業を支える。
2) 硝酸態窒素を削減する為に、田んぼに水を張る(冬水田んぼ)ことで、微生物の助けを借りて脱窒させる。

3) 環境アセスメントをより効果的に。
4) 環境教育を広める(命の大切さを)。学校ビオトープの活用。
(都市地域、地方地域共に)
5) 外来種、帰化植物を入れない。
6) 種々の観察会やそれに類するイベントを行なうこと

3．誰が、どのように進めますか。(県民、事業者、行政等の役割)
1) 環境に配慮した人間活動を推進する(市民、事業者、行政)。
1) 不法投棄の規制や監視(行政)
1) 地域住民と行政とのコミュニケーションが必要。(地権者も含む)
1) 生物調査をする(固有種などの保全)(市民、行政)
1) 市民･行政･企業等が対等な立場で連携しながら推進する。
1) 里山や生物を保全するために、重要性をひろく呼びかけトラスト制度を活用する。
(市民、企業)
2) 高齢化する農業従事者への援農。(市民、行政のしくみづくり)
2) 冬水田んぼの推進(農業、行政)
2) エコ農業の推進(市民･行政･企業)グリーンコンシュマー(市民)
4) 環境教育を広める(市民･学校・行政･企業)。
6) 行政や学校、市民、企業などが一丸となったしくみやネットワークを作る。
(※数字は課題に対しての対応。)

4．自由記述
･里山シンポジウム分科会「里山と水循環」では、水循環から考える里山保全をどうすれば良いかを検討してきました。2007 年度は千葉市大藪谷津の湧水、湧水を利用した田んぼの活用(保全活動)の現場を観察し、水循環と生物多様性を考えてみました。参加者は、専門家(大学研究者)、地元市民、地元保全活動団体、水循環と生物に関心のある市民、行政(県･千葉市)の方でした。保全するためには、地元の方の理解、地権者への理解、他の地域からの応援、行政との話し合いが先ず大切であると感じました。

※1 枚で収まらない場合は、２枚になってもかまいません。

戦略グループ会議　報告書

＜戦略グループ会議の名称＞ 里山と生物多様性	＜参加人数＞ ５８　人
＜主催グループ名＞ 里山シンポジウム　下泉・森のサミット	＜代表者名＞ 鈴木優子
＜実行委員名＞ 松永　美知子	＜共催（協力）団体名＞ 生活協同組合エル
＜開催日時＞ 平成19年7月1日	＜開催場所＞ 千葉県立中央博物館

＜会議で話し合われたテーマの概要＞

里山の生物の多様性を保全するためには、農的環境の持続と地域社会が存続できる「なりわい」が必要である。一例として千葉の気候にあった養蜂業、ハチと生物の多様性についての対談と、生物多様性の講演。グループ討論では、里山の景観図を見ながら、生物の多様性に支えられる、伝統的、または新しい専門的、技術的な「なりわい」、職業集団を育む可能性や、地域社会の存続を提案した。

各グループ会議からの提案

１．各グループ会議にとって、生物多様性の保全・再生のための課題は何ですか。

①里山の生物多様性が、どんどん消えていく。

②里山を支える農林業や、里山の多様ななりわいが食べていけなくなった。継承者がいないので将来の希望がない。

③担い手がなくて、付加価値のある商品開発～流通～販売の仕組み開発が脆弱。

２．課題を解決するために、何をすべきですか。

里山の生物多様性の資源を活用する研究と意識の変革で、とりくみを展開する。

農的環境の持続と、地域社会が存続できるように、生物多様性をいかした「なりわい」を各地域で育成すること。

①若い人たちなどが農業をしやすくするシステムづくり　} 休耕田対策など今ある資源の活用

②バイオエタノール原料を栽培する。

③働いていない人に農業などを通じて働くことの喜びを伝える。
④県民全体が自然に対しての価値観を変える。 → 多少高くても買う　} 意識の変革。

⑤それぞれの「なりわい」には、役所の縛りがある → こうありたいという意志を県民がもつことで、行政のしばりをうすくする。

⑥都市と農村の交流のしくみづくりをすすめていく。

⑦援農ボランティア（都市シニア層）支援策、情報コーディネート。

⑧レンタル農園、水田を含め、担い手の多様化。

⑨環境保全に良い生産や、ブランド化に地域ぐるみで取り組む。
⑩地域のなかで幼いうちから自然体験学習をすすめる。
⑪便利になりすぎて忘れてしまったものがある、もう少し、自然を大切にするアクションを起こしていくべきではないか。
⑫自然を活かした視点、里山へ都市部の人を呼び、自然の良さをアピールする。

３．誰が、どのように進めますか。（県民、事業者、行政等の役割）

①　県民→　ＮＰＯ活動を活発化させ、県民一人一人が意識変革をする機会を増やす。地元のものを消費する。
②県民・都市住民→　援農ボランティア、地場産業を大切にする価値観を持つ。
③事業者→　開発行為をする場合には、環境保全のための対価を負う。
④地権者→　他所者でも受け入れる寛容さ、そのためのルール、環境保全、産物に付加価値をつける努力をする。
⑤行政→　県民の意見を良く聞く、啓発活動の強化、自然保全活動への各種補助。
⑥ 行政→　法律手続きの簡素化、里山の開発制限、ボランティア支援、起業支援、小中学生の環境教育、とくに農林業体験、生物多様性カリキュラムを必修として実施する。
⑦ 行政と市民の協力→　行政が総合的に施策を取り入れ、市民が決めた地域性を大事にしていく。
「なりわい」の担い手を作っていく→信頼関係を作る→手助け（地域をコーディネート・財源）が行政。
⑧行政→新しい技術を若い世代が利用し実績を出し地域に普及できるよう各種支援。
⑨企業・市民・地権者・行政→　全国的に見ても千葉県の風土が強みで、生物の多様性をもたらす養蜂業などの「なりわい」を大切に残す支援・施策をとる。

４．自由記述

感想

生物多様性を育む重要なフィールドである里山が荒廃しつつある、その要因を作っているのは　社会構造の変化であり、人間の関り方。そのつながりが何となく伝わったように思う。

グループ討論「生物の多様性が支える里山のなりわい」で提案されたキーワード

農業関連　加工品（商品化）にするまで
体験　わら細工、しめ縄づくり　かかしづくり　味噌づくり　漬物づくり
パンづくり　そばづくり　うどんづくり　ザーサイづくり　棚田

戦略グループ会議　報告書

稲作　有機米　　人糞肥料　堆肥の活用
野菜栽培　有機野菜　　直売所をつくる　オーガニック・レストラン
畑のオーナー制
ふるさと産品：会員制により四季定期便
果樹栽培　　果実園　干し柿　梅干　果実酒　ジャム　ソース
花卉栽培
桑畑と養蚕
カブトムシ　オオクワガタ栽培　　落葉樹の堆肥　　イナゴ
畜産　牛　豚　鶏:牛乳　加工品　ハム　ソーセージ　肉の加工品　鶏卵
鶏肉
農業用水地で鴨

養蜂　　無添加・無加工の安全な蜂蜜　蜜源の違う多様な蜂蜜　蜜源の林野の確保
森林・林業　　薪炭林活用
炭焼き　竹炭（住宅用）づくり　竹酢液　木酢液　竹の子の活用
間伐材の割り箸づくり
杉玉づくり
杉や竹を使って環境教育
森林体験　雑木林を訪ねる　自然観察会
鎮守の森　神輿の材料　森による農業生産物　　落ち葉の堆肥
土砂の流出防止　水源涵養林機能　防風防砂林　加工工場　製材　大工、建築工務店
鳥　害虫の駆除　糞の堆肥　鳥の憩いの場　山菜
川、堰　　魚つり　タニシ　シジミ　ウナギ　ドジョウ　ナマズ　ヘラブナ　ホタル
観光　　山菜・きのこツアー　竹の子採り　村に民宿　　ホタル　グリーン・ツーリズム　サイクリング
運搬業　　バスの活用、物も運ぶ
復活　　消防団　　宮大工
自然　　自然観察　環境学習　自然ふれあい広場　　自然博物館　イノシシ
キノコ　ハツタケ　ふきのとう　鳥
薬草
つまもの
ケアハウス
伝統文化　工芸細工　草木染　茜染め　リースづくり　竹細工
井戸掘り

戦略グループ会議　報告書

戦略グループ名 私達 大網白里町の生物多様性保全・再生	参加人数 19名
主催グループ名 環境会議おおあみしらさと21	代表者名 田邉 宏雄
実行委員名	共催(協力)団体名 九十九里浜の自然を守る会 大網白里 十枝の森を守る会 自然観察と史跡探訪大網白里ウオーキング会
開催日時 平成19年7月4日　18時から20時	開催場所 大網白里町中央公民館 2階講義室

会議で話し合われたテーマの概要

この地域の生物多様性の保全・再生のためまず出発点としてこの地域の生物相・環境条件の現状を知ろう.

各グループ会議からの提案

1．各ｸﾞﾙｰﾌﾟ会議にとって，生物多様性の保全・再生のための課題は何ですか.

大網白里町地域(周辺関連地域を含む)の生物相・環境条件の現況に係わる情報が整備されていない，情報過疎地域である.(情報は全く無いことではなく，町民レベルで共有されていないことにもある)

2．課題を解決するために，何をすべきですか.

この地域の生物相・環境条件および関連事項の現況把握を含め基礎情報を整備する．また現況に至る歴史的な経緯もあわせて調査する.

大網白里地域は，他地域でも同様の所が多いと思われるが情報空白地域(過疎地域)である．その上で生物多様性の保全・再生事業の具体化を考え，実行を働きかける.

3．誰がどのようにすすめますか.(県民，事業者，行政等の役割)

専門家，各分野関係者の指導も受け，町民(県民)が行う．町の環境基本計画で示された協働事業のひとつと位置づけられる.

フィルド調査を主体にデータの集積を図る．データは電子化，データベースを構築する.

環境会議おおあみしらさと21では

・自主調査(まず現存植生の調査とその可視化した植生図の作成から始める)
・各団体との共同調査の企画，実施.
・各団体，個人から提供されるデータの受皿.
・各種単発情報(新聞･雑誌等の記事，個人の通報など)の収集，その受皿.
・当地域に係わる調査，研究報告の収集(保全･再生のための手法，技術に関するものを含む).

これら環境情報のデータベース化は，当面暫定的に統計メッシュ毎に整理，対応できるように考えている.

データベースシステムの構築，メンテナンスに関しては行政に担当してもらいたいと考えている.

4．自由記述

・千葉県の生物多様性情報･研究センターの早期整備が望まれる.
・かならずしも専門家ではない住民レベルの参加が期待される．データの質を確保するため最小限必要な事項，記録(調査)方法すなわちマニュアルを作成する.
・情報が公開されたことによる盗掘，持去り，破壊などの被害防止のための対応は不可欠，非公開の方法の検討などが必要である.
・普及啓発，情報公開を目的としてニュースレター等の刊行を考えたい.

戦略グループ会議　報告書

＜戦略グループ会議の名称＞ 埋め立て地と生物多様性	＜参加人数＞ １６　人
＜主催グループ名＞ NPO 法人幕張海浜公園を育てる会	＜代表者名＞ 那須智子
＜実行委員名＞ 那須智子、畝山順一	＜共催（協力）団体名＞ ベイタウングリーンサム 幕張ベイタウンにエコパークをつくる会 ベイタウン菜の花クラブ
＜開催日時＞ ２００７年7月１１日（水）午後６：００〜９：００	＜開催場所＞ 打瀬公民館・講習室

＜会議で話し合われたテーマの概要＞

幕張新都心等の人工の埋め立て地でも、浜辺や防風林、公園緑地、街路樹、水辺等に様々な生物が暮らしており、またその一方で、それら環境を保全・再生・育成・活用する市民活動等がはじまっていることから、それら各活動に関わる人々などが集合し、拠点での生物の存在の実態についてと、活動事例などを、お互いが情報共有するところからはじめた。そこから、埋め立て地に暮らす私たちの活動と身近な生物との関わりについて実感することや課題等、さらに、次世代にとっての生物多様性の重要性について考えた。

各グループ会議からの提案

１．各グループ会議にとって、生物多様性の保全・再生のための課題は何ですか。

- 埋め立て地のような「二次的自然」において、「自然」や「生物多様性」をどう考えるか？、都市的な要請とのバランスをどうするべきなのか？
- 自然環境と人との関わりあいをどのようにつくっていくのか？また、そうした環境を継続維持管理してつくっていく担い手はだれで、しくみはどうあるべきなのか？
- 自然を回復するという行為について、住民、行政の理解を得ながら活動することの難しさ

２．課題を解決するために、何をすべきですか。

- 自然と人との関わりあえるような状態を広めていく必要がある
- 生物情報の共有化、過去や現状をイマジネーションできる仕掛けづくり
- 活動団体等の連携、ネットワークづくり
- 担い手が育ち、継続して取り組むことができるようなシステムづくり

３．誰が、どのように進めますか。（県民、事業者、行政等の役割）

○県民（活動団体）

- 今回戦略グループ会議に参加した活動団体同士間から、生物情報や活動情報の共有化と、それぞれ協力できることを進め、ネットワークを広げていきたい

戦略グループ会議　報告書

・ 今後、次世代を担う子どもたちが、生物多様性に触れながら、何を欲しているのかを知り、そのために都市の公園等では何ができるのか、一緒に考える機会をつくる

4．自由記述

《今回、埋め立て地（とくに幕張エリア）で寄せられた生物資源等の情報》

・ 野鳥（渡り鳥類-コアジサシなど、キジ、ヒバリ、、、）
・ 昆虫（ミミズ、アゲハチョウ、アカタテハ、ベニシジミ、モンシロチョウ、セセリ、テントウムシ、カメムシ、ハマベゾウムシ、イトトンボ、コオイムシ、マツモムシ、、、）
・ 植物（ハマヒルガオ、キノコ類-ハツタケ、キンラン、、、）
・ 魚類（イワシ、アカエイ、クロダイ、、、）
・ 貝類（ツメタガイ、マテガイ、、、）

★今後、市民から寄せられた生物資源情報等をとりだめていき、情報を共有化しながら、埋め立て地での生物多様性のありかたについて考えていくための基盤として活用していきたい。

※1 枚で収まらない場合は、２枚になってもかまいません。

戦略グループ会議　報告書

〈戦略グループ会議の名称〉 遺伝子組み換え作物と生物多様性	〈参加人数〉 ２２人
〈主催グループ名〉 ちば環境情報センター	〈代表者名〉 小西由希子
〈実行委員名〉 小西由希子	〈共催（協力）団体名〉 市民ネットワーク千葉県　食と農部会
〈開催日時〉2007 年 7 月 11 日（水）	〈開催場所〉県庁１階多目的ホール

〈会議で話し合われたテーマの概要〉

生物多様性の視点から、遺伝子組み換え作物の問題について、まず「どんなことが問題と考えるか」を各自出し合った。出てきた課題を３つ（消費者・食、農業、全般的な課題）に分け、それぞれを解決するためにはどんなことが必要かを、各自ポストイットに書いた。

最後に遺伝子組み換え大豆とそうでない大豆で作った豆腐、同じ価格ならどちらを選ぶか尋ねた。

各グループ会議からの提案

１．各グループ会議にとって、生物多様性の保全・再生のための課題は何ですか。

☆消費者･食について

1.食べることへの不安がある

2.遺伝子組み換え食品に関して、正確な表示がなされておらず、(EU は 1%未満でも表示の義務があるが、日本は 5%未満なら許容範囲）消費者の「知る権利」が保障されていない。

3.食品の安全性確保が十分ではない。これからの将来に起こりうるリスクを考えたときに管理しきれるのか。

4.消費者の８割は食べたくない、と答えている現状。

☆農業

1.自家採種している有機農家で種子汚染の心配がある。

2.風評被害をどうするか

3. GM ナタネが自生した事実があり、安全な農業が守られていない。

4.県では、現在遺伝子組み換え作物の栽培指針を作成中である。

☆全般的な課題

1.交雑についての議論や検討が行われていない。

2.安全性の確認も十分行われていない。

２．課題を解決するために、何をすべきですか

☆消費者･食について

1.安全ならば、販売し利益を得ようとする企業が証明してほしい。

2.EU 並に 5%未満の表示するよう国の制度改正が必要。消費者が選択できるようきちんとした表示が必要。

3.国・県等が国民･県民への情報提供を増やすべき。安全性については、県の食品等の安全・安心の確保に関する条例に基づくリスクコミュニケーションの中で、十分議論する必要がある。

4.消費者が選択できるよう表示制度を確立し、検査体制を整える。

戦略グループ会議報告書

〈戦略グループ会議の名称〉 農林業と生物多様性	〈参加人数〉 102人（別紙参加者名簿のとおり）
〈主催グループ名〉 印旛郡市土地改良協会	〈代表者名〉 金親博榮（かねおやひろし）
〈実行委員名〉※協力者 清水・髙橋・伊藤・林・小倉・尾高・小川	〈協力団体名〉 水土里（みどり）ネット印旛沼（印旛沼土地改良区）
〈開催日時〉 平成19年6月30日（土）　1:30pm～4:45pm	〈開催場所〉 印旛沼土地改良区

〈会議で話し合われたテーマの概要〉

田んぼのなりわいと生物多様性

「農林業と生物多様性戦略ｸﾞﾙｰﾌﾟ会議」は、水土里を守る農業者と生物多様性を中心に環境保全活動を行う市民ほか農業・農村整備を図る関係者など102名が参加して水土里ﾈｯﾄ印旛沼で行われました。農業者にとって「生物多様性(・・？)」となることから、aciesの渡辺氏から「水田と生物多様性」について、まずは話題提供をしていただき、足下で育つ生き物のことを思い出してもらい、環境に配慮した水田農業や農業農村の整備、二次的自然（水土里）を守ることで生物の多様性が図られるなど、その多さ少なさの課題も含み田んぼのなりわいを振り返るきっかけ作りから始まり、続くﾌﾘｰﾄｰｸでは、日本農業新聞の板垣氏がｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰとなり「生物の多様性を図るためにあなたができることは？」を中心に会場の声をすくい上げてもらい、市民ｻｲﾄﾞからは里山や里地の荒廃問題、有機農業の推進で図る生物多様性など意見が飛び出し、農業ｻｲﾄﾞからは、ｺﾒ作り農家のきびしい現状や千葉ｴｺ農業また冬期湛水の取り組み、農業農村のもつ多面的機能の維持に通じた農地・水・環境保全向上対策への注文など、事例紹介を中心に意見が出され、あっという間の90分でした。締め括りに堂本暁子知事から、農業環境が大きな曲がり角にきているなか生物多様性と農業を考えたとき、かつての日本は、生態系の循環を生活の中と農業の中に取り入れてくることの天才であったと思うことから、水の循環とか生物の循環とか、色々な循環の視点からもう一度考え、ずっと培ってきた農業をさらに良い形で21世紀の中で発展させていく。その手法については、農業のﾌﾟﾛの方々に「これからは、こういうふうにすることがいいよ！！」ということを、みんなで考え、意見を出し合っていくことが大事と語り、最後に食の大切さを結びとして農業に対する熱い期待を寄せていただきました。

また、印旛郡市土地改良協会から差し入れとして、おやつの時間に「田んぼを守る魔法の粉」で作った米粉ﾊﾟﾝがｻｰﾋﾞｽされ、米消費拡大と水土里を守る作品のひとつ！とPRがありました。

☆農業

1. 自家採種をする農家が身を守るのではなく、「仕掛ける側」（加害者）が農家の種の保全を担保すべき。国・メーカーがこぼれ種が自生しないようにきちんと管理すべき。
2. 風評被害を防ぐためには情報提供が大事なので、栽培履歴をなるべく明らかにし、消費者に提供できるようにする。風評被害は必ず出ると思うので、遺伝子組み換え作物の作付けを許可するならその対応をあらかじめ考えておく必要あり。
3. まず、行政が実態を把握する必要がある。→農業に関する影響があるか、ないかも含めて検討が必要（行政と市民）。

   県として農業を守り育成するために、「安全」を売りにする。有機農業では原則として GM は認めていないので、その原則を守る。

   コメの GM 開発の研究が進む中で、千葉県としての方向性を市民と考える必要がある。

   現時点で大部分の県民が遺伝子組み換え野菜に不安を持っていると思われる以上、栽培しないほうがよいのではないか。
4. 遺伝子組み換え作物の栽培指針について

<u>栽培を許可しない</u>・・・栽培されれば汚染はおこるので、県内で栽培させないことが第一。県は、北海道並の距離をとった厳しいルール（指針）を作るべき。

<u>栽培を許可する</u>・・・実効性の高い指針を！100%交雑なしはムリなら、合理的な指針を作成すべき。栽培を許可するなら交雑防止（距離をとるなど）を確実にとること。交雑防止について、ゼロリスクを求めるのか。他の農法との共生をはかる必要もある。

5. 消費者側も、高くても買うという行動が必要。

☆全般的な課題

1.交雑により拡散し、生態系に影響を与える可能性が十分考えられるので、国の研究など情報収集をし、議論を進めることが必要。

2.野生生物への影響について、大学や行政研究機関の知見を加えて広く検討すべき。行政（国レベル）での研究が重要。

3．誰が、どのように進めますか（県民、事業者、行政の役割）

消費者・・・安全なものは高くても買うことを行動で示す。

事業者（開発・販売企業）・・・安全ならばそれを証明すべき。

農業者・・・栽培履歴を明らかにする。

国・・・表示についての制度改正。

県・・・国の調査・研究についての情報収集をし、県民への情報提供をおこなう。県内遺伝子組み換えナタネまき散らしの現状の調査を行う。遺伝子組み換え作物について、県民と議論の場をつくる。

4．自由記述

会議の最後に、遺伝子組み換え大豆で作った豆腐と、そうでない大豆でつくった豆腐が同じ値段で売られていたら、あなたはどちらを買いますか？との問いに、無記名で回答してもらった。

遺伝子組みかえ大豆を使った豆腐を買う・・・０人

遺伝子組み換えでない大豆で作った豆腐を買う・・・１１人

どちらでもかまわない・・・５人